日本一の柑橘を生み出す島で今に伝わるスローライフを楽しむ

平成25年、蛇石さん一家は、柑橘の専業農家として、松山の沖合約10㎞にある瀬戸内の離島で「みずたま農園」を経営することにした。以来、島暮らし、島時間が、四国とは縁もゆかりもなかった都会育ちの夫婦を魅了し続けている。

蛇石さん一家
夫 大哲さん 44歳、妻 美歌さん 36歳
長女 8歳、次女 6歳、長男 3歳
ご夫婦とも調布市出身。平成25年12月に東京都羽村市から中島に移り住む。

縁側に揃う一家。居間には大哲さんの趣味のドラムが2セット鎮座している

移住を支えるネット環境

蛇石さん夫妻は、東京都西部のベッドタウンから中島に移住して以来「毎日が楽しくてしかたない」と目を輝かせる。

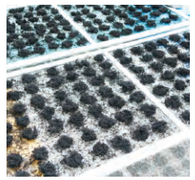
安定した勤務先に不満はなかった。生活も保証されていた。が、都会のサラリーマン生活や往復3時間の通勤で、自分がロボットであるかのような無力感に苛まれていた。

何気なく検索したスマホから「農業と音楽で地域を結ぶNPO」のコピーが目に入った。これが、中島への移住のきっかけとなった「農音」※との出会いだった。

農音メンバーに誘われ、初めて訪れた中島は、エネルギッシュな街を見慣れた彼には当初、心もとなく映った。

しかし、「この島で作れない柑橘はない」と言われる中島には、日本一おいしいみかんを育む気候と、古民家と耕作放棄地があった。インターネットを通じて販路を確保すれば、生活できるとみた。

誇りを持って自分たちらしく生きるため、二人は柑橘を栽培し直販する専業農家になることを決めた。景色のよい場所への移住を希望した彼らに、中島の青く透き通った海と深い緑は、十分に応えてくれるものだった。



上／倉庫の屋上は、乾物の加工場でもある。島ヒジキを干しているところ
左／美歌さんは染色の妙にはまっている。帽子と手に持つワンピースはヒジキ染め

島中に広がるみかんの水玉模様が、農園の名前の由来

※農音…首都圏から20～40代の若者が中島に移り住み、移住を促進するNPO法人。移住者が島で柑橘を作り、未移住メンバーが都市部で販路を開拓する

競争しない社会の魅力

蛇石家のお隣には、島暮らしの知恵を授けてくれる「師匠」が住んでいて、島に伝わる捨てるものを出さない師匠の暮らし方に、とても感動すると語る。

たとえば、伐採した柑橘の枝葉で風呂を沸かす。その熾(おこ)き炭で料理をし、最後に残る灰で染色や畑の土壌改良をする。生活に必要なものと生活から出るものが循環する素晴らしさ。

夫妻は、まるで磯遊びでもするかのように、耕作や草木染めや火のある生活を楽しんでいる。更に太陽光発電、バイオトイレと、スローライフへの夢はどんどん膨らむ。

夫妻は日々の暮らしをブログで発信している。そこには「ここ中島　何と申しますか、島全体に商売っ気が皆無です。そしてそれこそが僕達がこの島を愛している最大の理由な気がします」とあった。

ゆったり流れる島時間と手つかずの自然に包まれて家族と過ごす時、二人は、人間本来が持つ喜びを噛(か)みしめているように思われる。

蛇石さんが暮らす宇和間（うわま）の集落。対岸に見える大きな島は怒和島（ぬわじま）

どの畑も家から数分程度の距離にある